

新年度が始まりました!!

令和4年度という新しい年度が始まりました。子どもたちは入学式があり、新社会人は入社式があつて、みんな期待に胸をふくらませていることでしょう。

皆様ご承知のとおり、稲むらの火の館は「濱口梧陵記念館」と「津波防災教育センター」の二つの施設からできています。「記念館」は梧陵翁の幅広い活躍を皆様にお伝えし、教訓としていただくという施設です。特にコロナ禍の現在、梧陵さんが安政年間に江戸で大流行したコロナや天然痘対策を支援したことなどを取り上げた医学への貢献もあります。また、ロシアによるウクライナ侵攻がありますが、あの時代、黒船が往来し我が国へ攻めてくるのではないかという心配から、自分達の手で故郷を守ろうと広村稽古場での訓練・学習は、防衛の意味もあつたようです。

この原稿を考えていた3月16日の深夜、東北地方で震度6強の地震があり、17日早朝に解除されましたが、津波注意報が発令されました。

梧陵さんの危機管理意識は、本当に現在社会でも十分な教訓となっています。とは言っても、自然災害や疫病というのは、ある意味仕方のないことだと思いますが、隣国への侵攻というのは、これは人々の友好という考え方で防げるものです。



今、稲むらの火の館の「大使の森」ではピンクや黄色のきれいな花が咲き始めています。

これらの花は、平和の象徴であつて、各国の駐日大使様が来館された時に、記念植樹していただいたものです。これらの花は、平和のシンボルとして、友好の証として見守り続けたいと思います。

「第16回稲むらの火講座」開催!!

本年1月に計画をしました「第16回稲むらの火講座」は新型コロナ・オミクロン株の感染拡大防止のため延期していましたが、改めて開催します。

特に講師をお願いしています、大阪府立大学客員研究員山地久美子先生には、令和2年3月、3年9月、4年1月と予定していながら、コロナの影響で取り止めてきました。ご多忙な先生に何度も、予定を入れていただいたことは、誠に申し訳なく思っています。

改めて、山地先生をご紹介します。

大阪公立大学客員研究員、神戸大学地域連携推進本部地域連携アドバイザー・フェローをされて



ています。淡路島の野島断層保存館や東日本大震災の宮城県南三陸町、熊本地震被災者の皆さんとともに「全国被災地語り部シンポジウム」を開催、全国の被災地をつなげる仕掛人として活躍されています。昨年12月には神戸大会の実行委員長として、運営されました。シンポジウムには、「稲むらの火の館」も第1回からお招きいただいています。神戸大会には「広川町日本遺産ガイドの会」のメンバーも10数人参加しました。

今回の第16回稲むらの火講座講演会は

日程 令和4年6月4日(土)

午後1時半～3時

場所 稲むらの火の館3階ガイダンスルーム

演題 「全国被災地語り部シンポジウムの
取り組みから考える防災・減災」

コロナが終息してきているようですが、今回も60名定員で開催します。当日まで連絡することも考えられますので、必ず申込してください。

電話 0737-64-1760

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第13回 高齢社会の火災リスク

春4月は、空気が乾燥しており、1年の中でも林野火災の出火件数が最も多く、あらためて「火の用心」を肝に銘じなければならない季節となっている。通常、日本では桜前線と共に、火災が多発する地域が変遷していくとも言われている。

ところで、近年の火災事案の仔細を見ていると、自然要因ではなくて、もうひとつ、社会要因の中に火災のリスクを押し上げている“遠因”があることがわかる。それは、人口の高齢化である。

火災統計によれば、住宅火災の死者の7割超を、65歳以上の高齢者が占めている(令和2年)。

年配のかたは、もともと防火意識が高く、火の扱いには慣れている。しかしひとたび失火すると、本人が思っているほどには機敏に火を消し止められず、初期消火のタイミングを逸して延焼させてしまうケースがある。さらに、責任感も強いいため、さいごのさいごまで自分だけで火を消そうと注力して、その結果、逃げ遅れてしまう。

自宅の家電が老朽化してきても、それを大切に使用していらっしやる。思い出の詰まった家電の不具合を、一刀両断に責めるわけにはいくまい。しかしその帰結として、「電気火災」のリスクを高めてしまっているのも事実である。

火を取り扱う際には、ひとりではなく、その場に複数人がいるようにしたい。家の中には、「住宅用火災警報器」を正しく設置してほしい。基本的には寝室と、寝室がある階の階段上部に設置する必要がある。ちなみに、この「住警器」も老朽化する。平成23年に設置が義務化されてから、すでに10年が経過している。あの頃に無料配布を受けた人などは、取り換えなければならない。

仏壇の蝋燭など、「普段は特段、危なくない」という油断が、「まさか」の失火につながることもある。心うららかな春の日にこそ、みんなで火の用心に努めたい。

稲むらの火講座

「地震・津波から命を守る」

3月20日、ちょうど1年ぶりに「稲むらの火講座」を開催いたしました。今年度、9月に予定した講座はコロナで取り止め、1月に計画を延期しましたが、これもコロナ・オミクロン株の感染拡大で中止・延期いたしました。同時並行して、3月に計画していたものが、今回開催できました。久しぶりの開催で、多くの皆さまが参加してくれました。

今回は、和歌山地方気象台の石井嘉司台長に、「地震・津波から命を守る～広川町で、南海トラフ地震にどう備えるか～」というテーマでお話いただきました。石井台長は、気象台の中でも特に地震・津波の専門家として勤められてきました。

昨年12月の和歌山県での震度5弱の地震をはじめ、3月の東北での震度6強など大きな地震が起っています。また、トンガ沖の大噴火による津波警報が出たりで、地震・津波に無関心では居られない状態が続いています。そういうこともあったのか、多くの皆さまが参加してくれました。

ご講演は、地震発生のしくみ、地震計と震度計



の違いなど、詳しい説明がありました。

また、南海トラフで発生する地震、それに伴い起こる津波の話、緊急地震速報のしくみなど話していただきました。また、現在の科学技術では南海トラフ地震の確実な予知は、不可能です、ということも明確に話されました。だからこそ、その時に備えて家具の固定や、水・食料の備蓄も適正にしておく必要があるのかな、と思いました。聴講された皆さまは、話に引き込まれて、聞き入っていました。日頃からの心配事の解消に、少しでも役立っていただければ幸いです。